

入江葵

その子は松岡耕平の斜向かいに座っている。入江葵という男性の新入社員だ。

パソコン作業をしていると、つい視界に入ってしまう。なるべく視線が合わないように意識はしているが、一日に数回彼の方を見てしまう。その度に葵が真剣な顔でパソコン画面に目を向けているのが見えてしまうのだ。視線は合わないが、つい気になってしまう。

彼がこの部署に配属になってから三か月になる。最初はなかなかのイケメンだと思った程度だが、こうも毎回のように入ってくる、じわじわとサブリミナル効果のように脳内に浸透してくるのだ。

葵は少し髪にボリュームがあって、他の男子とは違った。女の子のように長くはないが、もっさりとしていて、まさにジャニーズ系のような顔立ちをしている。我が部署の女子社員にモテるだろうと思うが、意外とそうでもないようで、特に葵がモテている様子はなかった。少し童顔なので、あまり興味を持たれないのだろうか？ 仕事以外で話しかける女子はいなかった。

そんなことで葵がどう思われているのか、神谷裕子という女子社員に訊いたことがある。

「今度来た、入江君って女の子にモテそうだね？ ジャニーズ系じゃない？」

そう言うと裕子はこう言った。

「ああ、そうですね。モテるかもしれませんね。私はあまり興味ないですけど」

少し鼻で笑うような感じだった。彼女はわりと男好きなイメージがあるが、その裕子が「興味ない」というぐらいだから、あまり女子からは関心を持たれないのだろう。

確かに葵は少し、なよっとしていて、男らしさが無い。そこが女子には受け入れられないのかもしれない。

耕平が見る葵は、特に女の子っぽい仕草とか言葉遣いをしているわけではない。みんなには普通に敬語で話している。決して女装男子を意識しているわけではないと思うのだが、彼のもっている雰囲気やオーラが女の子っぽいのだ。笑い方などは特にそうだった。男の笑い方ではない。「ふふふ」という感じで笑う。本人も無意識でやっていることなので、仕方がないのだろう。

耕平が今まで生きてきた中で、ちょっといないタイプの男子だった。耕平は決してゲイというわけではないが、なぜか気になってしまうのだ。なんというか男子なのに女子みたいなのだ。もっと言うなら、葵の中に女の子が棲んでいるとでもいうのだろうか？ とにかくそんな雰囲気だった。

葵は誰に対しても愛想がいい。とても好感の持てる印象だが、それも見ようによっては八

方美人のように見えてしまう。男なので、八方美人というのは変かもしれないが、女性が棲んでいる彼なので、そういう言い方になってしまうのだ。

きっと部署内の女子もそんなことを感じているのだろう。ただ接するときは普通だ。露骨に嫌な顔はしない。笑顔で話したりする。もちろんそこは社交辞令というやつだ。

その日、葵が社員食堂で一人でランチを食べていたので、耕平は同じテーブルに座って、話しかけてみた。

「おつかれさま」

と言うと、彼も笑顔になって「お疲れ様です」と言った。その笑顔に少し癒される自分がいることに驚きながら、

「ここいいかな？」

と耕平は言った。

「どうぞ」

そう言ってくれたので耕平は葵の隣に座った。

「いきなり変なこと訊くけど、入江君って彼女とかいるの？」

「いないですよ」

彼はあっさりとそう言った。

「え、なんで？ 女の子にモテそうなのに」

「モテないですよ。僕、あんまりそういうの興味なくて」

「そうなんだ。女の子に興味ないってこと？」

「それもあるけど、彼女作ったり、付き合ったりとか、なんか面倒くさくて」

「へえ、そうなんだ。プライベートは一人の時間を楽しみたい感じ？」

「そうですね。家でのんびりしてる方がいいですね」

食べながら話していると、なんだか妙に緊張してきた。耕平はそんな葵をじつくりと見てしまった。見れば見るほど女の子っぽい笑顔だ。

「松岡さんは彼女いるんですか？」

「いないよ。僕の場合は欲しいけどできない感じだね」

そう言って彼は自虐的に笑う。

「そのうちいい人が出来ますよ」

葵は言った。

「そうかな。自分では諦めてるんだけど。昔から女の子にはモテなかったからな」

「そんなことないですよ。松岡さんは真面目だから」

「そうでもないよ。ずいぶん手抜きしてるからね」

なぜか葵の前ではそんなジョークを言うてしまうのだ。そして彼を笑わせようと思ってしまう。それは男子が好きな女子を笑わせようという感覚に近かった。

「あ、そうだ。明日の飲み会って出るの？」

翌日に送別会が予定されていた。同じ部署の女の子が寿退社するので、その送別会が開か

れるのだ。彼女は五年ほど頑張っていたので、みんなで送別会をしようということになったのだ。

「いちおう出ます。僕もお世話になったので。松岡さんは出ないんですか？」

「出るよ。みんな出るからね」

「そうですね。よかった」

彼はなぜか「よかった」と言った。それがどういう意味なのか、まったく解らない。

「たまにはみんなで集まって飲み会っていうのも楽しいですよね？」

「そうだよ。入江君は飲み会好きなの？」

「お酒はあんまり飲めないですけど、ワイワイするのはわりと好きですね」

「そうなんだ。一人で陰に籠るタイプに見えるけど」

「家にいるときはそうですけど」

まあ自分も似たようなものだと思平は思っていた。休みの日に誰かと出かけるなんて、面倒くさいし、時間の無駄だと思うのだ。彼女がいなくて正解だと思うこともある。

休みの日にはのんびり朝寝して、起きたいときに起きて、朝ごはんを作って食べるのがいいのだ。

「自炊とかするの？」

「しますよ。誰も作ってくれないし。でも料理は好きだからいいんですけどね」

「そうなんだ。結構手の込んだ料理とかも作るの？」

「そこまでは。簡単なものばかりですよ。でもたまにはYouTube 動画を見て、レシピ真似して作ることはありますけど」

「へえ、まめだね」

「楽しいですよ。美味しく出来たときは満足感半端ないですから」

「それは解かる気がする」

「一人ですから、なんでも好きなもん作れますからね」

「食材の買い出しからするの？」

「そうですよ。そこが楽しいんですよ」

「本格的だね」

「松岡さんはしないんですか？」

「簡単なものだったら作って食べるけど、だいたいがコンビニ弁当で済ませちゃうかな」

「僕も前はそうでしたけど、飽きるんですよ」

「そう。それはある」

「だから自分で作ってます」

そんな葵のプライベートな話も聞いていて楽しかった。なんだかそれが貴重な情報のように思えたのだ。

耕平は葵がこの部署に来てからというもの、女子社員にはまったく興味を示さなくなった。葵のことが好きまではいかないが、不思議な男の子という感じで、個人的には興味があ

ったのだ。彼はもっと葵のことを知りたいと思った。

「兄弟とかはいるの？」

今度は家庭環境を訊いてみる。

「いますよ。ウチ、兄弟多いですよ。五人兄弟で上四人が全部女なんですよ」

「へえ、そうなんだ。お姉さんばかりなんだ」

それは興味深い情報だ。上に四人姉妹がいるというのは珍しい気がした。

「そうなんです。大変ですよ。女ばかりっていうのも」

「それは大変そうだね」

「大変です。女子率高いですよ、我が家は。だから家出たんですよ」

彼は一人暮らしのようだった。それは知らなかった。

「でもさ、女ばかりっていうのも楽しそうじゃない」

「それよく言われるんですけど、ぜんぜん楽しくないですよ。姉弟ですからね。女って感じしないですよ。まったく地獄ですよ」

「女はもういいって感じ？」

「もういいです」

「だから彼女も欲しくないんだ？」

「それはあります。女なんか、どこがいいんだろうって思っちゃいます」

「なんかいろいろエピソードがありそうだね。お姉ちゃんたちと」

「ありがとうございます。はっきり言ってウザいですね。女の実態が解ってますからね。結婚してあれと一緒に住むくらいなら一生独身でいいです」

その言葉に耕平は笑った。

彼から見たら、家に四人も若い女の子がいたら、さぞ楽しいだろうと思うが、実際にはそうではないのだろう。その姉たちの性格にもよるが、きっとわがままな子たちなのだろう。そんな中で暮らしていたら、葵もうんざりするはずだ。

「松岡さんは兄弟は？」

「うちは男二人だけ。すごい味気ないよ」

「いいなあ、その方がいいですよ。二人ぐらいがちょうどいいと思います。男同士なら気を遣わないし、いろんなこと共有できたりするし、最高じゃないですか」

「それはあるかもね。気は使わなかった」

「僕はそっちの方が羨ましいですよ。女は懲り懲りです」

「それで彼女は欲しくないんだ」

「そうなんです」

相当過酷な環境だったのだろう。その生活感が目に浮かぶ。葵も苦労しているのだ。